

一般研究助成報告書

研究課題

近代における茶道の「国民文化」化とナショナリズム

― 近年の海外研究を中心に ―

京都造形芸術大学非常勤講師

黒河 星子

研究代表

はじめに

今日、茶道は日本を代表する「国民文化」のひとつとして国内外に広く知られている。その歴史は長く、現代の主流派にとって象徴的な存在である千利休から数えても四〇〇年以上の歴史がある。一方で、今日の「国民文化」としての茶道の隆盛に関しては、明治から昭和初期にかけての時期が重要な意味をもっている。日本の近代化の入口において、茶道の国民化・大衆化の契機があったと考えられるからである。明治維新を経て日本が近代国家としての体制を整えてゆく中で、一方では芸道を含む旧来の伝統文化への批判が、他方ではそれらの伝統文化を「国民文化」「国粹文化」として再編してゆく動きがあらわれる。その流れの中で、明治初期には流派の衰退に直面した茶道も、「国民文化」の文脈において再編と意味づけがなされるに至ったことは、すでに茶道史研究者らが指摘してきた通りである。

ある文化が伝統文化として定着し、国民的普及に至るまでには、通常、教育をはじめとする国策とそれを下支える知識人らによるレトリックの形成が必要とされる。その過程で動員された代表的なツールがナショナリズムであり、それは文化領域における「文化ナショナリズム」から、政治的言説と結びついてしばしば極端な愛国主義・排外主義を伴うショービニズムに至る場合もある。「国民文化」としての茶道を支えてきたレトリックもやはり、明治中期以降の茶道の復興期から、日清・日露戦争を経て昭和の総動員体制に至る中でその内容と社会における役割を変化させてきた。

この問題は、一九九〇年代以降相次いで発表されている日本の茶道に関する歴史学的・社会学的研究の中でも論じられてきた。これらは研究方法と論点において異なるが、太平洋戦争へと続く日本の臣民教育および軍国主義のプロパガンダに茶道界がいかに関与したか等のセンセーショナルな議論を多く含んでいる。本論では、これらの研究成果を既存の国内研究と比較しつつ、その研究史上の意義と問題点を整理する。その上で、今後、近代茶道史に関する研究に求められる課題について論じたい。

一、国内における先行研究と海外の研究

近代茶道の歴史学的研究として第一に挙げられるのは、熊倉功夫による『近代茶道史の研究』（二九八〇）であろう。熊倉は同書でナショナリズムの影響について、「昭和十年前後の茶道研究の盛行は、一つは国粹的な日本文化再評価の中で、茶道がアカデミズムの側からも、大衆の側からも、非常に歓迎を受けたこと」を指摘している¹。熊倉は近代茶道の様式と理論体系を創り上げた家元、茶人、数寄者らの行動を後押しした大きな要因として大衆的ナショナリズムの影響に注目した。一方で、茶道の近代史をナショナリズムとの関わりを中心に論じた国内研究は現在のところ限られている。その代表的な研究としては、田中秀隆による『近代茶道の歴史社会学』（二〇〇八）がある。田中は、近代茶道の思想的基盤を築いた人物として、田中仙樵、岡倉天心、小宮豊隆、柳宗悦らの思想を取り上げ、近代茶道思想の確立とナショナリズムとの関連性を論じた。その中で田中は、美学的な観点を重視する岡倉天心の茶道論を「生活構成の茶」、そして精神修養の要素を重視する田中仙樵の茶道論を「人間形成の茶」と区別することで、近代茶道思想におけるナショナリズムの指向性の差異についても指摘している²。

この他に茶道とナショナリズムの関連性を論じた研究としては、岩井茂樹の論稿「『日本的』美的概念の成立（二）―茶道はいつから「わび」「さび」になったのか？」（二〇〇九）が挙げられる³。同論文で岩井は、膨大な茶書等の分析を通して、茶道の理念を説くキーフレーズが「和敬清寂」から「わび」「さび」へと移行してゆく様を実証している。その上で岩井は、「わび」「さび」という概念が茶道の根本理念であるという理解が定着したのは昭和以降であり、文化ナショナリズム

の高まりを背景に、日本精神としての禪の評価とそれに伴う利休の再評価を通じて千家・禅学者・歴史学者の共同作業によって成し遂げられたと論じている。この主張は、茶道の「国民文化」化するなわち伝統文化としての茶道の位置が形成される過程に、利休の再評価と禪に基づく思想の強調があったことを示唆しているという意味において重要である。

上述のように、近代茶道とナショナリズムの関係は国内において既に論じられ、いくつかの論点が提示されてきた。一方で、これまであまり深く掘り下げられることがなかった論点として国策としてのナショナリズムと茶道とを直接関連づけた議論、あるいは海外文化との対比における茶道文化の自己意識に関する議論が、一九九〇年代以降の海外研究において見られる。ジェニファー・アンダーソンの『日本の茶の儀式入門』（一九九一）⁴、バーバラ・モリの『茶道の伝統的日本芸術を学ぶアメリカ人―伝統芸術の国際化』（一九九二）⁵、クリスティン・グースの『芸術、茶と産業―益田孝と三井グループ』（一九九三）⁶、ルパート・コックスの『禅芸術―日本における美的型の文化の人類学的研究』（二〇〇三）⁷、そしてモーガン・ピテルカの『日本の茶文化―芸術、歴史、実践』（二〇〇三）⁸、および『手作りの文化―日本の茶焼、庇護者、茶人たち』（二〇〇五）などがある⁹。

これらの研究の中で、近代史に位置づけて茶道とナショナリズムの関係を最もラディカルに論じたのはティム・クロスである。彼は、『日本の茶のイデオロギー―主観、超越、国民的アイデンティティ』（二〇〇九）の中で¹⁰、太平洋戦争前および戦中のナショナリズムの動員において茶道が果たした役割について論じた。この研究の特徴は、明治から昭和初期にかけて国策として推進されたナショナリズムと、茶道の関わりを直接的に論じている点であろう。同書でクロスは茶道史を概観しながら、茶道思想と軍国主義的ナショナリズムの共通性について考察している。その中でとくに注目すべき論点は、以下の二つである。一つ目は、明治五年（一八七二）に三千家から京都府に提出されたという『茶道の源意』と、昭和十二年（一九三七）に文部省が編纂した『国体の本義』の共通性を指摘し、それらによって茶道が近代日本のナショナリズムの理論的基盤となり得たとする点。二つ目は、戦国時代から「武」の精神と強く結びついてきた茶道の思想と総動員体制下で強調された日本的死生観の共通性を主張している点である。もっとも、これらの主張は刺激的で興味深い論点を提供しているものの、単に両者における共通性の存在を説くにとどまり、具体的な裏付けは乏しく妥当性そのものにも疑問を残している。

このようなクロスのアプローチに対して、より多角的かつ具体的な論証を試みたのがクリスティン・スーラックである。その著書『茶を創り、日本を創る―実践としての文化ナショナリズム』（二〇一二）の中でスーラックは、通史的な歴史考証と、家元組織の分析やメディア論、参与観察等の社会学的検証を通して、文化ナショナリズムの典型的事例としての茶道の特徴を総合的に分析している¹¹。同書は、二〇一四年度の「アメリカ社会学会アジア部門出版賞 (Section on Asia and Asian America, Asian and Transnational Studies Book Award)」を受賞しており、英語圏での茶道理解に大きな影響を与えている。次章では、このスーラックの研究について考察する。

- 1 熊倉功夫『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会、一九八〇年）、三二頁。
- 2 田中秀隆『近代茶道の歴史社会学』（思文閣出版、二〇〇八年）。
- 3 岩井茂樹「日本的」美的概念の成立（一）―茶道はいつから「わび」「さび」になったのか？』『日本研究：際日本文化研究センター紀要33』（二〇〇六年）、二九―五三頁。
- 4 Jennifer Anderson, *Introduction to Japanese Tea Ritual* (Albany: State University of New York, 1991).
- 5 Barbara Mori, *Americans Studying the Traditional Japanese Art of the Tea Ceremony: The Internationalizing of a Traditional Art* (San Francisco: Mellen Research University Press, 1992).
- 6 Christine Guth, *Art, Tea, and Industry: Masuda Takashi and the Mitsui Circle* (NJ: Princeton University Press, 1993).
- 7 Rupert Cox, *Zen Arts: An Anthropological Study of the Culture of an Aesthetic Form in Japan* (London: Routledge Curzon, 2003).

- 8 Morgan Pitelka, ed., *Japanese Tea Culture: Art, History, and Practice* (New York: Routledge, 2003).
- 9 Morgan Pitelka, *Handmade Culture: Raku Pottery, Patrons, and Tea Practitioners in Japan*, (Honolulu, University of Hawai'i Press, 2005).
- 10 Tim Cross, *The Ideologies of Japanese Tea: Subjectivity, Transcendence, and National Identity*, (Folkestone, Kent: Global Oriental, 2009).
- 11 Kristin Surak, *Making Tea, Making Japan: Cultural Nationalism in Practice* (California, Stanford: Stanford University Press, 2012).

二 'Making Tea, Making Japan' における議論

スーラックによる同書は五章構成になっている。まず第一章「茶を準備するー空間、物、動作」(Preparing Tea: Spaces, Objects, Performances)は茶道の概要を把握するための説明文であり、茶道の道具や作法についての現象論的な説明として詳細かつ精密であるばかりでなく、視覚的な描写で美学的側面や背景にある精神的側面をも浮き彫りにしている。本章はその性格上、事象の説明に多くが割かれているが、単なる解説に留まらず茶道に表象される「日本らしさ」(Japaneseness)´そして茶道の中で強調される「日本らしさ」が、「国民文化」といかなるつながりを有するのかについて著者独自の分析を含んでいる。著者によれば、茶道が国民性を「凝縮」するのは、日本の日常生活のあり方と同じ部分と反する部分を同時に有するためである。その上でこの章の結びでは、「区別」、「差異化」、「特定」という相互作用が「空間」、「道具」、「点前」といった茶の構成要素を日本的なものとしていると分析している。すなわち、日常との対比が茶道の「日本らしさ」を特徴づけつつも、それが「国民文化」として共有されることで日常との連続性を保ち、結果として「国民的共振(national resonance)」を誘発しているという議論である。

第二章「茶を創るー文化慣習の国民化」(Creating Tea: The National Transformation of a Cultural Practice)は茶道史の概説であるが、近代以降において茶道が「国民文化」としての地位を獲得する過程とその背景に力点が置かれている。とくに近代の部分は、「数寄者」、「女性」、「知識人」というように、それぞれの時期に中心的役割を担ったグループについて論じられている。著者はこれらのグループをキーワードに、茶道の国民化の時期と要因を説明する。ここでは明治から大正にかけて勢力をもっていた数寄者の言説に見られる茶道の国民的意味付け、次いで女子教育を通じた国民化について史料に基づく論証がなされている。そして、第三の時期として岡倉天心『茶の本』を筆頭に、知識人の言説が茶道の国民化に決定的な役割を果たしたと論じている。これらの議論はいずれも目新しいものではないが、国民文化としての萌芽を近代以前の茶の湯のなかに見出している点は注目に値する。ここでスーラックは、「市民社会なき市民的礼節」という池上英子の表現を引用しながら¹²、江戸時代に茶の湯が共通の美意識に支えられた身分階級を超えた交流の場として機能していたこと、さらに各種芸道のなかでもとくに権力との関係が強固であったことを指摘している。

第三章「茶を営むー家元制度の分析」(Selling Tea: An Anatomy of the Iemoto System)は、茶道流派の家元に関する歴史社会学的考察である。この章でスーラックは、家元の権力掌握および、組織としての勢力拡大の過程とその背景を論じている。ここでの議論の特徴として以下の三点が挙げられる。一つ目は、ナショナリズムとジェンダーを関連づけた分析である。スーラックは、女性の門弟層は規模が大きだけでなくエリート男性よりも家元の権威への依存度が強く、また許状は茶道の外の結婚市場における価値を持った点を指摘する。二つ目は、茶道が国家主義を強化したという主張とそのメカニズムの説明である。三つ目は、第二次世界大戦後における茶道流派および家元制度の隆盛を、経済的側面に加えて文化ナショナリズムの側面から分析している点である。

第四章「茶を演ずるー日本らしさの実践と実演」(Enacting Tea: Doing and Demonstrating Japanese)は、現代の茶道流派についての著者自身の知見に加え、参与観察、茶人らへのインタビューに基づく社会学的考察である。ここでスーラックは家元の権威について、茶道流派の組織構造と師弟関係の分析を通して論じている。著者の専門分野である社会学的考察を中心としたこの章では、稽古や公的な場所での実演における茶人の言説の中で強調される家元の権威と茶道の「日本らしさ」が結びつくことで生まれる相乗効果を分析している。

最終章である第五章「茶室の向こう側ー文化ナショナリズムの人間行動学へ向けて」(Beyond the Tea Room: Toward a Praxeology of Cultural Nationalism)では、教育やメディアを通じた茶道の表象とその影響を分析し、教科書、美術館、雑誌、テレビ等において茶道が国民文化としていかに表象され、そのイメージを国民へ拡散し、植え付けているかを分析している。その中で著者は、テレビや映画で茶道はネガティブなイメージも含む様々な形で表現されるが、それらは常に国家の伝統文化に必須のものとして描かれていると指摘している。

12 池上英子は日本人の文化アイデンティティ形成の歴史における、江戸時代の交際文化の重要性を指摘し、「政治体制的な意味で日本にも市民社会があったと言うのは強引だが、この時代の人びとは確かに、文化としての市民らしさ」「シビリティー」に満ちていた。」と論じている。池上英子『美と礼節の絆ー日本における交際文化の政治的起源』(NTT出版、二〇〇五年)、二六頁。

三、「ネイション・ワーク」の概念

前章で概観したスーラックの研究の特色のひとつとして、「ネイション・ワーク」(nation-work)という枠組みを用いて茶道のナショナリズムを論じている点が挙げられる。この用語は、ティモシー・ブルックとアンドレ・シュミットが共著書『ネイションワークーアジアのエリートと国民的アイデンティティ』(二〇〇三)の中で用いた¹³、「国民的アイデンティティ」の創出を促す活動を表す概念としての「ネイションワーク」を元にしているが、スーラックはこれをさらに厳格に概念化した独自の用語としてハイフン入りのこの語を用いている。スーラックの説明によれば、「ネイション・ワーク」は運動およびイデオロギーとしてのナショナリズムと集合的存在としてのネイションネスの双方を具象化し、両者を一つに統合するものである。

この概念を用いる利点について、スーラックはネイションを構成主義の観点から分析する上でその有用性を指摘する。グループ形成においては境界の内と外だけではなく、グループ内部における「差異化」が重要であり、その分析にはメンバーシップの程度を測る必要がある。そしてそれは、「ネイション・ワーク」を含む三つの作用、「区別」(distinction)、「特定」(specification)、「差異化」(differentiation)によって検証可能であるとしている¹⁴。さらに、この研究手法が「通常ネイション・ワークが働く二つのレベルであるナショナリズムとネイションネスの交点に位置している」日本の茶道の考察に役立つであろうと強調するのである¹⁴。

第四章における「ネイション・ワーク」の実例として踏み込んだ分析では、茶道を典型的な日本文化の表現として、自らも日本人としてその役割を担う観衆へ披露することで、良質な国民となるための「啓発」となったと指摘する。スーラックは、とりわけ子供の前での「実演」は茶道が参加者を「啓発」する様を観察する格好の機会であるとして、小中学校の課外授業の例を取り上げている。そしてその「啓発」を、「日本らしさ」を指定する「特定」、正しい行為とそうでない行為を峻別する「区別」、良質な構成員とそれ以外の構成員に分類する「差異化」として論じている。

とりわけ参与観察やメディア論による分析は、「啓発」から「身体化」へ至る様や、茶道を通し

てナショナリスト的言説が強調され、拡散される様を具体的に描写している。スーラックによれば、「ネイション・ワーク」としての茶道は、「常在的」、「制度的」、「社会政治的」という三つのパラメータのすべてにおいて特殊であるという。その特殊性とは、具体的には以下の点である。すなわち、長きにわたる政治権力との関係により、一から伝統を創り出すことを要せずに「屈折した国民らしさ」を定着させる場を提供した点。また身体修養として道徳的性質を植え付ける手段となった点。さらに、「日常的なものの非日常バージョン」として存在することで、国家建設から国家の維持へ移行する段階においても威光を保つことができた点である。とりわけこの三つ目の指摘は注目に値する。スーラックの議論では、茶道は日常と区別される要素と日常と共通する要素を併せもつために、極端にナショナリズムが称揚される時期のみならず平時においても文化ナショナリズムの拠り所となるのである。

13 Timothy Brook, *Andre Schmid, Nation Work: Asian Elites and National Identities* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2003).

14 Surak, *Making Tea, Making Japan*, 8.

おわりに

スーラックの研究に関しては、「ネイション・ワーク」の枠組みを用いつつ茶道を文化ナショナリズムの典型例として取り上げること、近代国家形成過程と戦時体制下、そして戦後の国際主義・平和主義という異なる状況におけるナショナリズムとその連続性を示した点が注目される。この大きな見取り図は、今後のナショナリズム研究の中で参照されるべきであろう。

一方で、スーラックは現在に至るまでの「国民文化」としての茶道の位置を通史的に叙述しているが、近代茶道史の叙述そのものにおける独自性は乏しい。「茶道を広めることによって、家元は大衆に軍国主義的ナショナリズムを伝達し、茶道を帝国の物語の中に組み込んだ」という一文に象徴されるように¹⁵、昭和の総動員体制下のナショナリズムの醸成に茶道が積極的に加担したことを暗に示唆しているが、クロスと同様に具体的な裏付けはなされていない。これまで国内の研究者の多くは、戦時体制下のナショナリズムと茶道の関係を防衛的なものとして、むしろ消極的に評価してきた。また、その根拠も十分に示されてきたといえよう。その一方で、クロスやスーラックは、軍国主義的ナショナリズムと茶道の協力関係を主張している。彼らの歴史論証は必ずしも精密とはいえないが、これらの議論は一つの重要な論点を示している。それは、文化ナショナリズムが国家や社会に具体的にいかなる結果をもたらすのかという問題である。

一般に文化ナショナリズムは、先鋭的なナショナリズムのイデオロギーとは別次元で、文化によって国民を統合する性質を持つ。芸道の中でも茶道が代表的地位を獲得した理由としてスーラックは、「総合文化」という性質に加えて、ロジックとそれを体現する作法が結びつき、かつ大衆伝播に適した性質を持っていることを指摘した。その一方で、戦時体制下ではより強い軍国主義のイデオロギーが要求される。実際に、第二次世界大戦までは国民精神を表すより強力な文化的シンボルとして武士道の存在があった。このことと関連して注目すべきは、武士道がその思想的根拠を儒教と禅に求めたように、明治以降、茶道復興の文脈でも同様の主張がなされてきたことである。近代における国民文化の創出は、“その国らしさ”の定義を通して「伝統」を選別する過程を必要とする。今後、茶道史という枠を超えて近代日本における伝統文化の創出過程を検証し、その中で芸道、とくに茶道が占める位置とその意味を論じる作業が改めて必要とされるだろう。

15 Surak, *Making Tea, Making Japan*, 103.